



こんぴらさん障壁画の謎

—若冲・岸岱をめぐって—

【第1章】

画題踏襲

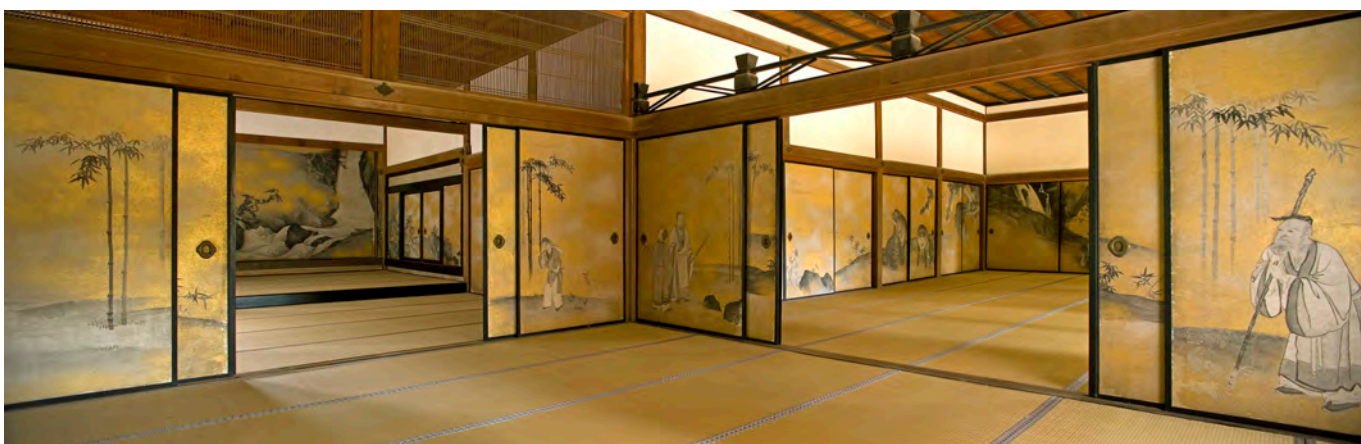
金刀比羅宮の障壁画については土居次義氏の研究に詳しく報告されている(『讃岐金刀比羅宮の障壁画』(マリア書房、1974)。同氏「讃岐金刀比羅宮の伊藤若冲」『國華』(1046号、1981))。さらに、伊藤大輔氏により金刀比羅宮所蔵主要絵画作品の調査(2002~2004)が行われ、その成果を『金刀比羅宮の名宝—絵画』(金刀比羅宮、2004)としてまとめられた。伊藤氏は、金刀比羅宮では障壁画を新しく描く際に、先行する画題を踏襲する慣習があることに着目し、各障壁画のつながりを論じた¹。以下、土居・伊藤両氏の研究及び『金刀比羅宮史料²』を基に概略を確認しよう。

『證記』「金光院主之事」宥盛の事項に「一、院内ハ唯今と違せまくかるき事之由然共客殿等は張付惣金之間之由」と記され、現在の建築規模になる以前の客殿等は金箔で装飾した室であったことが窺える³。

表書院は円山応挙が描く以前にも瀧之間、七賢之間、虎之間、鶴之間⁴とよばれる部屋があったようで、応挙はこの図の配置に沿って天明7年(1787)夏と寛政6年(1794)10月に「山水の間」「七賢の間」「虎の間」「鶴の間」の障壁画を制作した⁵。



「鶴の間」円山応挙筆《芦丹頂図》《稚松丹頂図》

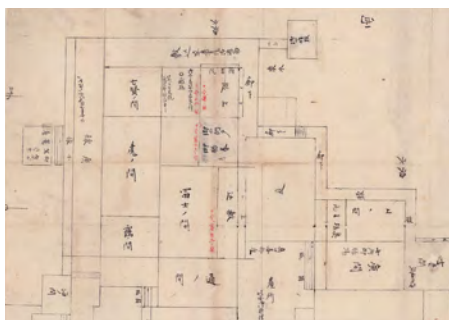


「七賢の間」円山応挙筆《竹林七賢図》より左「山水の間」《瀑布古松図》・右「虎の間」《遊虎図》をのぞむ



「富士一の間」 邨田丹陵筆《富士山図》

表書院の富士の間については、現在富士一の間と富士二の間と2室あるが、富士一の間はもとは持仏堂であり、富士二の間を富士の間とよんでいた。



『金刀比羅宮史料』72巻「奥表書院図」より表書院部分拡大

『古老伝旧記』によると、富士の間(今の富士二の間)はもともと桜の画が描かれていたので桜の間と称していたが、第7代別当宥榮(1666~1691)が青の無地張りに変更した。床の間がありそこへ狩野七之助による富士の掛物をして富士の間と称した。天保12年

(1841)2月18日に持仏堂を取除き富士一の間ができたようである。『富士之間絵画の来歴』には「社務所表書院北側の二室は古来富士の間(或藤之間)の称あり古く富士若くは藤の絵画ありたるものならんされど何人の筆にて如何なる図様なりしや判明せず。」と記される。『金光院御用留』安政6年(1859)2月26日の条⁸に、森一鳳が富士の間二夕間に富士山にしかるべき景色を加え描く計画があったことが記されるが、これは実現されなかった。そして、慶応2年(1866)に岡本常彦が床の間に富士、襖に箱根湖に富士の倒映する状景を描いた⁹。『富士之間絵画の来歴』に、図様は一の間の床に富士山を描き、二の間に裾野及付近一帯の湖水を描き、すべて墨画で色彩を施さず、のち経年の破損甚だしくなり当宮の什物として大切に収蔵するべきものとして明治初年頃剥ぎ取った。その後は白張のままにして富士の間の称は有名無実となっていたが、明治35年(1902)邨田丹陵が富士一の間に《富士山図》、富士二の間に《富士巻狩図》を制作し名実を全うしたことが記される¹⁰。



「富士二の間」 邨田丹陵筆《富士巻狩図》



奥書院は明和元年(1764)に伊藤若冲が上段の間《百花図》、二の間《山水図》、三の間《杜若図》、広間《垂柳図》を制作した。天保15年(1844)に上段の間《百花図》だけ残し、岸岱が二の間

《春野稚松図》を中心とした春の間、三の間《水辺花鳥図》を中心とした菖蒲の間、広間《水辺柳樹白鷺図》を中心とした柳の間を制作した。



「上段の間」伊藤若冲筆《百花図》



「菖蒲の間」岸岱筆《水辺花鳥図》より左「柳の間」《水辺柳樹白鷺図》・右「春の間」《春野稚松図》をのぞむ



表書院玄関は、『金毘羅庶民信仰資料集 年表篇』の記事に「天保8年(1837)3月29日、玄関床張付仕替え、高松の中川馬嶺に画かせる」「天保13年(1842)10月6日、玄関床張付の絵画替えのため中川馬嶺登山」と記される¹¹。『古老伝旧記』によると、以前は青紙張であったが、文政2年(1819)松にゑんこう(猿猴:手長猿のこと)、

その下に霊芝を水墨で描いた床張になり、天保8年(1837)3月19日には金地に仕立て中川馬嶺が水墨で松を描いたようである¹²。そして、明治16年(1883)に森寛斎が《檜樹鷲図》を描く。これは、奥書院の近藤有芳《瀧鷲図》を踏襲したものとみられる。樹木が松から檜に、ゑんこうが鷲に変更されたものの水墨で描く点は共通している。



森寛斎筆 檜樹鷲図



近藤有芳筆 瀧鷲図



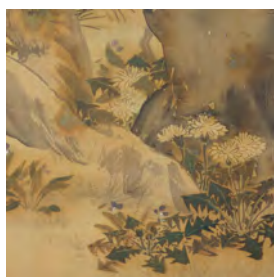
森寛斎筆 桜花小禽図



明治12年(1879)には崇敬講社本部の小座敷に、森寛斎が《桜花小禽図》《秋景遊鹿図》《群雀図小襖》を制作した。伊藤氏によれば、崇敬講社本部は明治10年(1877)の建築で先行する画題は

ないものの、森寛斎の作品は、応挙の表現技法をとりいれながら、奥書院の若冲、岸岱、有芳障壁画の構図や構想を参照し、モチーフを引用した特徴がみられるという¹³。

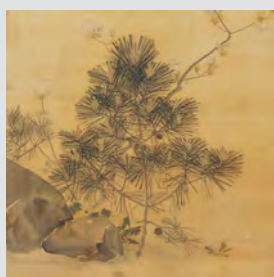
《 比較 画像 》



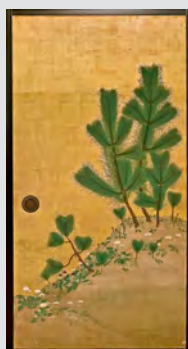
桜花小禽図 / 蒲公英



岸岱筆 春野稚松図の蒲公英



桜花小禽図 / 若松



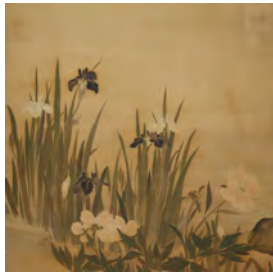
岸岱筆 春野稚松図の若松



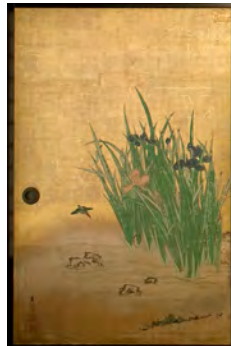
円山応挙筆 稚松丹頂図の若松



《比較画像》



桜花小禽図 / 杜若と芍薬



岸岱筆 水辺花鳥図の杜若



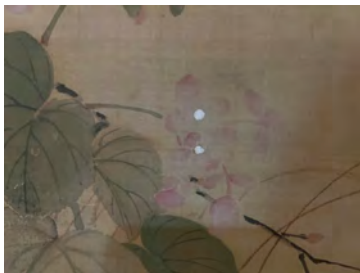
伊藤若冲筆 百花図の芍薬



桜花小禽図 / 翡翠



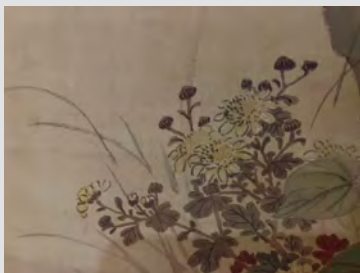
岸岱筆 水辺花鳥図の翡翠



桜花小禽図 / 秋海棠



伊藤若冲筆 百花図の秋海棠



桜花小禽図 / 菊



伊藤若冲筆 百花図の菊



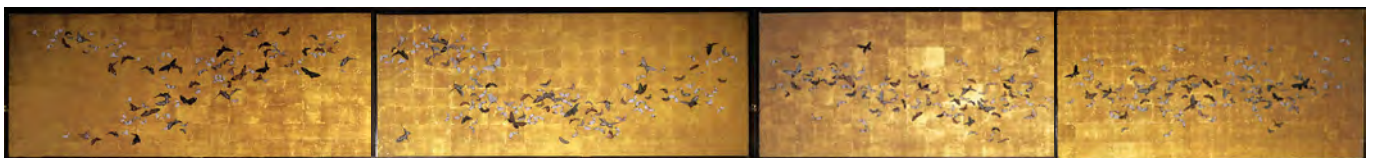
森寛斎筆 秋景遊鹿図



近藤有芳筆 秋に鹿図



森寛斎筆 群雀図小襖



岸岱筆 群蝶図

このように、金刀比羅宮では障壁画制作において前例の主題を継承する傾向がみられ、河野元昭氏はこれをテーマ・ヘリテッジと名付けた¹⁴。

以上、建築当初の障壁画の有無は不明であるが、おそらく表書院建築の早い段階からあったであろう桜の間が富士の間へと変更されたとき画題は踏襲されなかったようだ。若冲以前についても障壁画の有無は不明であり画題が踏襲されたかどうか分からない。文書の記録上テーマヘリテッジが確認できるのは、今のところ

天明7年(1787)に制作された円山応挙の障壁画が最初である。若冲・応挙に依頼したとされる当時の別当は第10代宥存(1761～1787)であり、以降テーマヘリテッジの傾向が書院障壁画においてみられるようになる。

表書院は公式的な儀礼や諸行事、接客饗応に使用されるため、各室の機能と序列に沿った画題を採用している¹⁵。一方、奥書院は内向きな私的空間であり、日常の安息の場でもある。そのため意匠は堅いものでなく花鳥画的な作風となっている。



- ⑦伊藤大輔氏論文pp.13-32
- ⑧『金刀比羅宮史料』は明治44年(1911)前後から昭和19年(1944)にかけて編集された90巻に及ぶ資料である
- ⑨『金刀比羅宮史料』19巻
- ⑩①『金刀比羅宮応挙画集』p.5「此客殿即表書院は其改築年代詳ならざれども応挙時代よりは更に古く、文書によればこれより以前既に瀧之間、七賢之間、虎之間、鶴之間等の称呼あり。之に依って見れば、現在の構図は応挙の創意になりしものなれども、図の配置は以前より存せし絵画の配置若しくは其称呼に従ひしものなる事明かなり。然れども以前存せしと思はるる、絵画の構図及画家の名は今詳ならず」
- ⑩②『町史ことひら3』p.170、天明4年(1784)10月19日座本荒木大吉一座の御書院での芝居空間の記事に「鶴の間、虎の間、七賢の間、富士の間」(『多聞院片岡章範日帳抜書』)の名称がみられるため、応挙が描いた天明7年(1787)以前に同様の名前がつく部屋があったことが分かる。
- さらに『金刀比羅宮史料』12巻『享保二年金光院日帳』(1717)正月朔日の條の記事内に表書院の鶴之間、虎之間、七賢之間、富士之間の名称がみられる。
- ⑩③虎の間(遊虎図)に「天明七丁未夏月寫 平安源応挙」、山水の間(春景山水図)に「寛政甲寅初冬 平安源応挙」の款記がみられ、鶴の間・虎の間は天明期、山水の間が寛政期とする説は一致しているが、七賢の間は天明期と寛政期の2説あり、最近は寛政期説が有力のようである
- ⑩④『新編 香川叢書 史料篇(一)』p.285『古老伝日記』
- 一、富士之間へ上の間出来候事
- 右は桜之繪有之候に付桜之間と申候、宥栄様思召に付青の無地ばりに相成、御床へ富士之横懸物狩野七之助画を御懸け富士之間と唱、御内証向御祝義事^(註)に、御用被成候御座敷に相成居申候所、天保十二丑年二月十八日持仏堂を取除、右富士之間之上の間初て出来申候事
- 『金刀比羅宮史料』46巻『進退仕録』『多聞院系譜の条』二代多聞院範清の項
- 「宥眼上人御指図にて娶申候則婚札の盃御寺櫻の間於御前被仰付候段祖母物語(中略)宥眼上人より婚札の被仰付者十二歳とあれは寛永十七辰年にあたる。櫻の間といふは今の富士ノ間の事也」と記され、第5代別当宥眼(1613~1645)のとき寛永17年(1640)には桜の間があったことがわかる。『金刀比羅宮史料』69巻『正徳元年金光院日帳上』正月二日の条に「一、今朝例之通五ツ時富士之間江御出被為遊御雑煮被召上(下略)」と記され正徳元年(1711)には富士之間となっている。また二月朔日の条に「一、今朝五ツ時御社参御仕廻被為成藤之間二而例之通御禮御請被為成候事」と藤之間の名称もみられる。
- ⑩⑤『金刀比羅宮史料』14巻
- ⑩⑥『金刀比羅宮史料』16巻『安政六年金光院御用留』(二月廿六日の条)
- 一、表書院富士之間二夕間御床江富士之掛物ヲ掛ケ襖紙ヲ張り富士之間ト唱居ル然ル処大坂鹿島屋長田作兵衛隠居施主二而大坂森徹山男一鳳江画為相認皆式御寄附為仕度旨京都大佛師當時御用達田中内蔵丞丞守節願人二而御作事奉行兩人江宛願書差出御聞届之事 但富士之間二夕間繪用之儀ハ富士山二可然景色を加へ認候様申達先下絵差出一覧可致旨も申達置候事
- ⑩⑦『表書院修理工事報告書』p.6
- 『金刀比羅宮史料』65巻(昭和10年2月編)『表書院富士之間元張附岡本常彦筆富嶽及裾野図』模写
- 富士一の間東側襖北から1枚目に「慶應丙寅春日寫 岡常彦」、二の間東側襖北から1枚目に「岡常彦」の落款が記され印章があったようである。模写図の添書に「襖及障子二面ケル全体ノ図ノ意匠ハ床二富士峰ヲ画キ襖ニハ裾野ト箱根湖ニ富士ノ倒映セル状ヲ写セルモノナリトイフ」と記されている。模写した時点で一の間床張り障子腰貼付1面、二の間障子腰貼付1面が現存せずと記されている。
- 土居次義氏は『讃岐金刀比羅宮の障壁画』P.16に岡本常彦は「京都四条派の画家岡本豊彦(1773-1845)の弟岡本助之丞の男であるが画名は高くなく遺作もあまりわれわれの眼に触れない。」と述べている。
- 生没年不詳。名は常彦。字は確乎。通称は典馬。号は菱邨、竹叢、芳翠流斎。岡山出身。上京して岡本豊彦に入門し画技を学ぶ。『平安人物志』嘉永5年、慶応3年版に掲載されている。(京都文化博物館『京都文化博物館開館十周年記念特別展 京の絵師は百花繚乱 - 『平安人物志』にみる江戸時代の京都画壇』1998)

- ⑩⑧『金刀比羅宮史料』14巻『富士之間絵画の来歴』に村田丹陵の制作のきっかけが記されている。
- 明治34年夏より村田丹陵が画筆を携えて高松に来ており、10月頃当宮に参拝し書院を拝観した折、絵画の話に及び富士の間の称あるに拘わらず当時白張りのままであったので富士牧巻きの図などを描けば名実相称のものになると雑談していた。県警本部長・黒河内良、高松市長・小田知周がこれ聞いて大いに賛同し社務所と丹陵の間にはいり尽力したところ11月に社務所は実費として金500円を支給し、揮毫は丹陵の寄付とするという交渉で纏まる。一旦丹陵は東京に帰って図の材料を集め、明治35年2月東京を発つに臨み、父直景が病に罹ったため、ようやく3月中旬になって門弟の伊藤紅雲、吉沼晚汀、佐藤千浦の3名を伴って琴平に着く。一の坂旅館高松屋に投宿し草稿の執筆に従事する。4月下旬門弟と太宰府神社に参拝し5月帰着。それから制作に励み8月下旬竣成する。社務所は労をねぎらい謝状及び銀盃1個を丹陵に贈った。
- 【謝状の写し】

村田丹陵氏

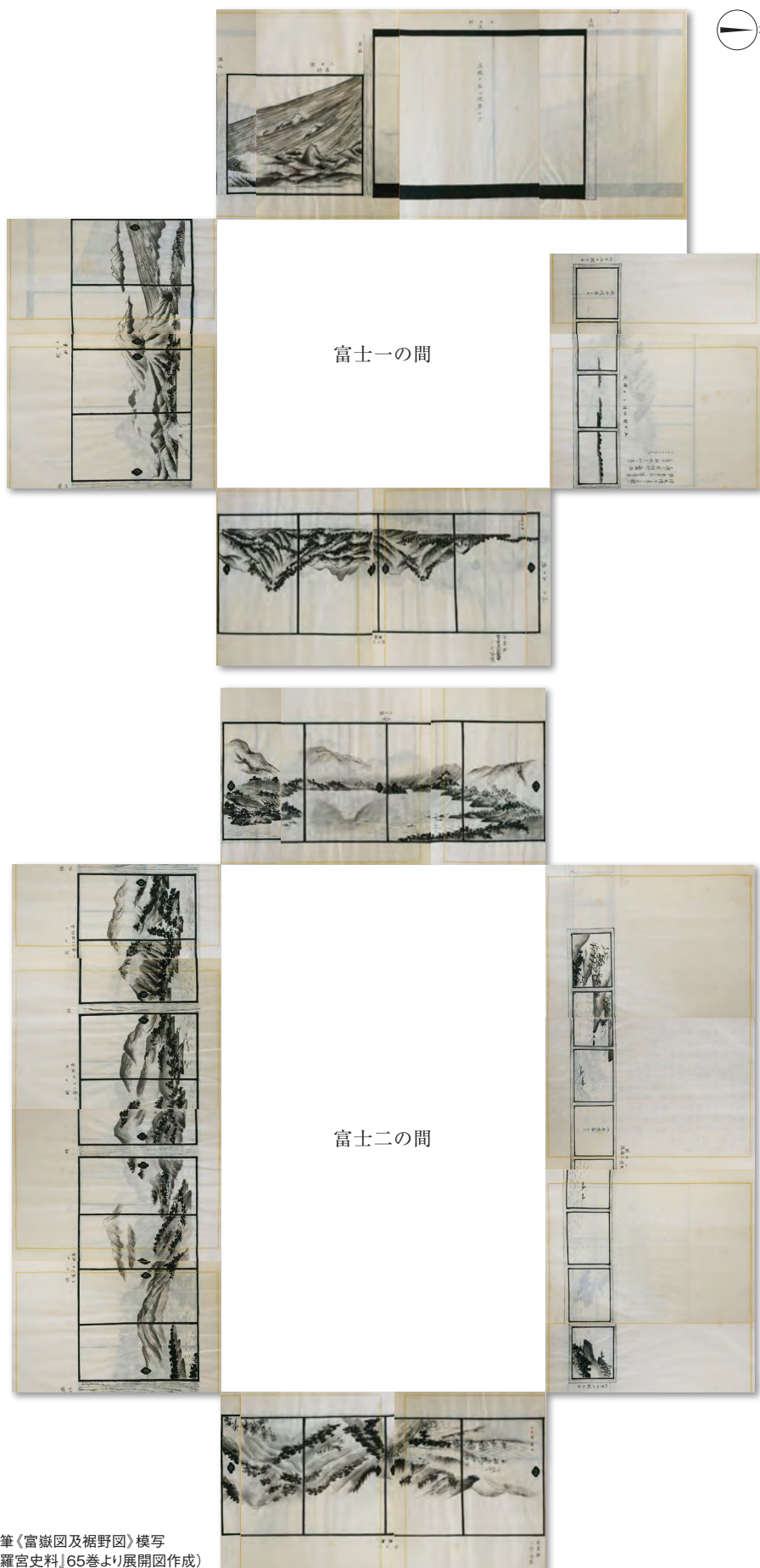
本宮ノ委嘱ニ依り表書院ニ富士牧巻図揮毫ニ際シ本宮尊崇ノ志ヲ表シ殊ニ拮据勵精五閏月能ク好果ヲ奏セラル茲ニ記念ニ為銀盃壹個ヲ贈與ス

明治三十五年八月
金刀比羅宮社務所

- 『金刀比羅宮史料』65巻『覚書』村田丹陵二関スル挿話によると
- 明治35年8月村田丹陵に対し金刀比羅宮社務所より銀盃一個を授与し門人3名には各木盃一個を授与、丹陵等は8月26日帰京した。丹陵の妻任子は東京の自宅に脚気が重症化していたが、舅直景は丹陵の筆勢が鈍ることを恐れ、制作中は丹陵に知らせず、障壁画が竣成した報を聞き病状を記して早く帰ることを知らせた。丹陵は急ぎ帰京するも妻の生前に面会することはできなかった。任子8月26日午後6時逝去、21歳。であったことが記される
- ⑩⑨『金毘羅庶民信仰資料集 年表篇』p.33
- 『金刀比羅宮史料』15巻『天保八年金光院御用留』p.124
- (三月廿九日の條)
- 一、此度御玄閣御床張付御仕替二相成高松画工中川馬嶺江為相書候事
- 右二付謝義之所作事奉行川崎猪八より見込ヲ附申出候二付相談之上左之通り相送一金貳両 謝義
- ⑩⑩『新編 香川叢書 史料篇(一)』『古老伝日記』p.285
- 一、御玄閣之床、金ばりに相成候事
- 右は天保八酉年三月十九日出来、尤已前は青紙張に有之候所、文政式卯年松にゑんこう、其下に靈芝有之候墨絵之張床に相成、是は宥怡様御代也、然る所此度天保八酉年金ばり附に相成、墨絵之松、高松家中中川馬嶺と申画師相認候事
- ⑩⑪伊藤大輔氏論文pp.26-27、解説 pp.351-356
- ⑩⑫河野元昭氏論文p.20
- ⑩⑬『金刀比羅宮応挙画集』p.5
- 表立たる諸儀式並参拝の緇紳諸候等の応接には此客殿を用ゐるが、二之間(山水の間)は主として諸候の座席に、七賢之間は儀式に際して院主の座席に、虎之間は引見の人々並に役人等の座席に、鶴之間は当時使者之間とも唱へ、諸家より来れる使者の控室に充当したりしなり。

参考文献

- ①『金刀比羅宮応挙画集』金刀比羅宮社務所第一課、1935
- ②『重要文化財金刀比羅宮表書院修理工事報告書』金刀比羅宮表書院修理委員会、1965
- ③土居次義『讃岐金刀比羅宮の障壁画』マリア書房、1974
- ④香川県教育委員会『新編 香川叢書 史料篇(一)』新編香川叢書刊行企画委員会、1979
- ⑤松原秀明撰『金毘羅庶民信仰資料集 年表篇』金刀比羅宮社務所、1988
- ⑥『町史ことひら3 近世・近代・現代 通史篇』琴平町、1998
- ⑦伊藤大輔『常若の絵画-金刀比羅宮の障壁画』『金刀比羅宮の名宝-絵画』金刀比羅宮、2004
- ⑧河野元昭『金毘羅障壁画試論』『金刀比羅宮書院の美 応挙・若冲・岸岱から田窪まで』金刀比羅宮・三重県立美術館、2007



岡本常彦筆《富嶽図及裾野図》模写
([金刀比羅宮史料]65巻より展開図作成)